このような仕事は、一人でできるものではありません。先代の円谷弥三郎・小針半次郎など、移住入植者と家族みんなの、はたらきと、近りんの人々の協力がありました。

こうして、入江農場を中心とした滑津原一帯の開こん地の大部分は、育苗、見本園などに使われ、種苗生産が盛んになりました。滑津原一帯は、今でも、有名な種苗地として発展しています。

三ケ村連合耕地整理組合　もと武士による開こんを始めたころは、水がたりなく作物が実らないので、困っていました。

明治十六年、水野谷宗三郎は、滑津原に水を引くために、関平村より瀬知房を通す、用水路を作る計画をたてました。しかし、県からの許しが出ないので、実施されませんでした。